

聖武天皇・・・責めは予一人にあり^{われ}

政変と兵乱、災異と疫病・・・天皇は、そのすべてを背負った。

林 亨

(1) 聖武天皇と光明皇后 僧玄昉が光明皇后を犯し奉ると藤原広嗣に密告され天皇が御簾の隙間から覗いていると皇后は11面観音となり、玄昉は千手観音となって現れたという話。とにかく光明皇后は情け深い人で温室^{うんしつ}を建て「我親^{みづか}ら千人の垢を去らん」と誓いを立て千人目の病人の膿を吸ってやったら大光明を放って阿闍^{あしゅぶつ}仏であったとか、最後は東大寺は光明皇后が建てた等、民衆には大変な人気があった。

一方命を懸けて民の為、国家のために努力したはずの聖武天皇。通説では聖武天皇は評判が悪い。この原因は天平12年から5年間で（藤原京）平城京、難波宮、恭仁京、紫香来宮、最後に平城京と遷都を繰り返して「世に彷徨5年」と言う言葉もあり、聖武天皇はノイローゼになっていたのではないかとする人さえある。

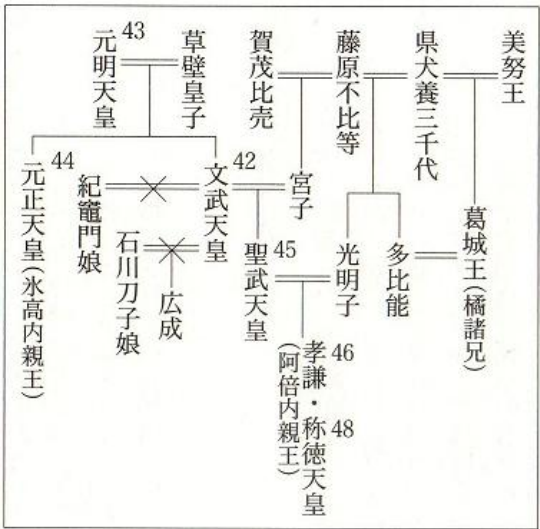
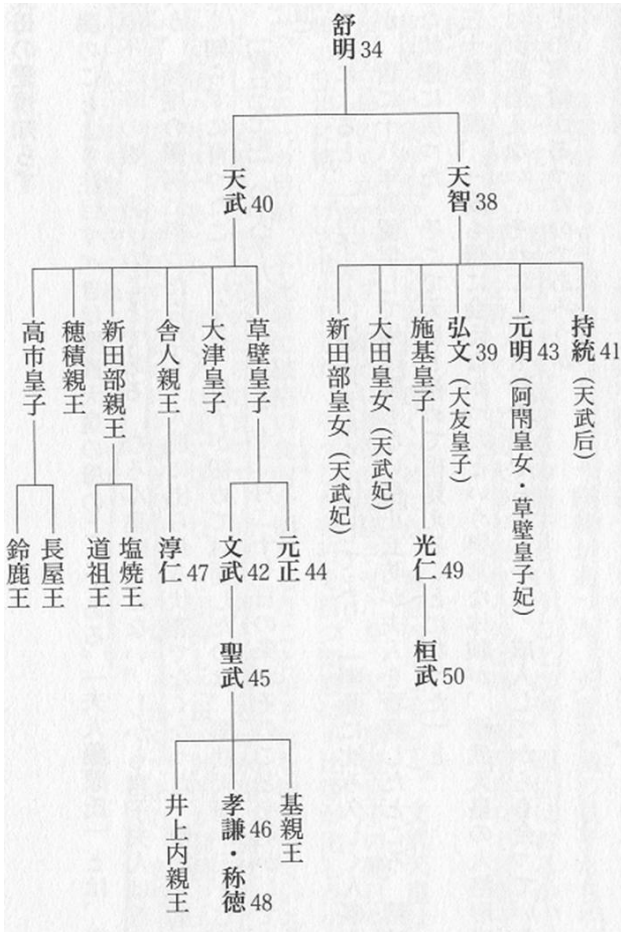
これらの誤解を解くため、聖武天皇の悩み、喜びを可視化することで聖武天皇の実像に迫ってみよう。

『参考』聖武天皇；701～756（56才）光明皇后；701～760（60才）行基菩薩；668～749（82才）

(2) 生い立ち 藤原京・平城京の時代は日本の古代国家が中国の唐を手本として、法律や制度などを定め国際社会で一流の国家であることを高らかに歌い上げた時代である。文武天皇（即位697～707）は即位後5年（701）正月元旦に藤原京の大極殿で盛大な朝賀の義を行い「蕃夷の使者左右に陳列す。文物の儀、此処に備われり」と。この年「大宝律令」が完成し天皇を頂点とした国家の骨格が出来た。また、天智天皇8年（669）以来32年ぶりの遣唐使が任命され、翌年6月一行は出来たばかりの「大宝律令」を持参して出発、また国名を「大倭」から「日本」と改めたことを伝え、慶雲元年（704）7月帰国した。

聖武天皇の誕生は大宝元年（701）で大極殿で盛大な朝賀が行われた華やかな年であったに比べ、皇子の誕生の記録は実にひっそりとしている。『続日本紀』には、大宝元年の末尾に「是の年、夫人藤原氏に、皇子^{あれま}誕生す」とのみで、やがて天皇になるべき皇子にしては誕生日は無論、祝賀の様も記録にない。また聖武天皇の諱^{いみな}（実名）は「首^{おびと}」として知られるが、公式の記録はなく年代が下がって平安中期の藤原行成の日記に「夢に出てきた」として記されているのが最初である。聖武天皇は諱を嫌って記録させなかったと言う説を京都女子大・瀧浪貞子氏がとっている。諱より注目すべきは生母の事である。生母は当時大納言であった藤原不比等の娘、宮子でむろん皇后ではない。宮子夫人は首皇子の出産が原因で極度の鬱病を患っていたらしくて、人前に出られる状態ではなく、聖武天皇は実母の愛情を知らずに育ったことになる。母子が初めて対面したのは聖武天皇が37

歳の天平9年（737）12月27日であったと。人格形成に大きく影響したと思われる。



天皇家と藤原氏の姻戚関係

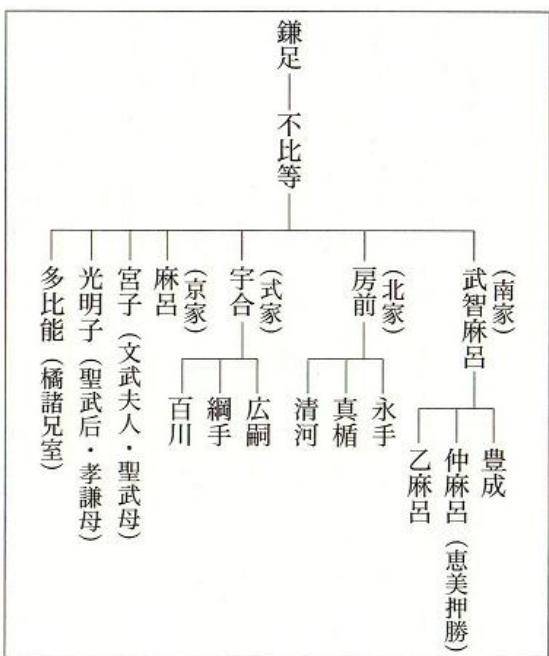
文武天皇が母阿閑皇女に譲位を漏らすほどの病に伏せたのは阿閑が47歳で、孫の首皇子はわずか7歳であった。阿閑は天智天皇の第4皇女で、天武天皇の皇太子だった草壁皇子との間に、文武・元正・吉備内親王をもうけている。7歳の首皇子がすんなり皇位を継承出来る雰囲気ではなかった事は想像に難くない。これまでの伝統から皇位は兄弟間で継承さるべきであるとする王公諸臣が多かった。天武天皇の皇子や孫がまだ健在である状況の中で、首皇子には文武天皇の嫡子と言うこと以外に、即位はおろか、皇太子になれる保証すらなかった。わが子の将来を想って、文武天皇が頼れるのは母の阿閑皇女と首皇子の外祖父不比等だけであった。文武天皇が25歳の若さで逝去した時、初めは任に堪えないと固辞していた母の阿閑が異例ともいえるべき即位を決断したのは、首皇子が成長するまでの中継ぎの役目を自覚したからである。首皇子は祖母の阿閑皇女すなわち元明天皇に守られて育つ事になる。

(3) 皇太子時代 文武天皇の意思を継いで母元明天皇が、慶雲4年(707)7月に即位すると、翌年を和銅と改元し、2月には平城遷都の儀を進め、藤原不比等を右大臣に任じ、和銅3年(710)7月平城京に遷都した。不比等の右大臣任官は聖武天皇の外祖父藤原不比等が政治の実権を握った事を意味した

遷都から3年がたった和銅6年11月、宮中に1つの事件が起こった。故文武天皇のキサキであった2人(石川刀子娘、紀竈門娘)が嬪号を剥奪されたのである。文武天皇には皇后はなく、藤原宮子夫人の他には2人のキサキだけで、石川刀子娘には広成と言う皇子がいたが、母親の嬪号剥奪により皇位継承資格を失った。首皇子が文武天皇の唯一の継承者となったのである。事実、この事件から7か月後、首皇子は皇太子となり14歳で元服し公的な地位を得たのである。

明けて和銅8年(715)正月、皇太子首は朝賀の儀において初めて礼服を纏い元明天皇に拝朝した。この時、東の空に瑞雲がたなびいた。9日後、元明天皇は「今年の元旦に、皇太子が初めて拝朝したところ瑞雲が現れた。よって天下に大赦を与えるように」と詔した。こうして首皇子の即位実現へ布石が打たれていった。

和銅8年8月28日に、「左目白く、右目赤し。頸には北極星を守る三ツ星、背には北斗七星を負い、」なる神亀が献上され、元明天皇の心を動かした。在位9年、ひたすら政務に励んできたが、老いた身に堪えがたく皇位を譲りたいが皇太子はまだ若い。そこで元明天皇は、自分の娘で文武天皇の姉である、氷高内親王に皇位を譲ることとした。これまでの皇位継承の事例からすれば異例中の異例であった。それでも4日後の9月2日に元明天皇は譲位の詔を下した。その時、首皇子は15歳、父文武天皇が即位したときと同じ年齢であった。宮中奥深く起居する皇子には政務は無理との判断があった。



藤原氏略系図

同日、直ちに、氷高内親王は大極殿で即位した。元正天皇である。S先の祥瑞から、和銅8年(715)は靈龜元年と改められた。結局、首皇太子は即位まで10年間の帝王学を学ぶ期間を得たし、君主として貴重な経験でもあった。

同日、直ちに、氷高内親王は大極殿で即位した。元正天皇である。S先の祥瑞から、和銅8年(715)は靈龜元年と改められた。

結局、首皇太子は即位まで10年間の帝王学を学ぶ期間を得たし、君主として貴重な経験でもあった。

靈龜2年(716)藤原不比等の娘、安宿娘あすかべひめ、のちの光明子が皇太子の妃として入内した。首と同じ年の16歳、血縁関係でいえば叔母に当たる。古代の婚姻は複雑である。

首皇太子19歳の時初めて「朝政を聴いた」と言いう。翌7月に藤原武智麻呂が教育の責任者に任命され、血気盛んだった皇太子

に対して「すすむるに文学を以てし、ただ匡すに淳風を以てす。太子愛に田獵の遊びを廃め、終に文教の善に趣きたまう。即位してのち、常に善き政を施して、百姓を恵みあわれむ、仏法を崇めとうとむ」となった。

養老5年(721)皇太子本人が王者となるべき資質を備えて貰う為、なんと16名の官人たちが任命された。葛城王は風流侍従と呼ばれた教養人、山田三方は新羅へ留学した元僧侶、山上憶良は遣唐使として入唐した万葉歌人、紀清人は国史撰修に携わり、越智広江は明法博士、山口田主は算術家、楽波河内は文章の達人、など多士

濟々である。皇太子は猛烈に勉強したに違いない。論語や史記、漢書は当然のこと中国の儒教の經典、歴史書、の他にも六種の技芸も嗜まねばならなかった。



正倉院宝物

聖武天皇が作らせた『鳥毛篆書屏風』六扇の内、第1・2扇である。第1扇には「主無獨治 臣有贊明」第2扇には「箴規苟納 咎悔不生」とある。意味は第1は「主、独治すること無くば、臣、贊明すること有り」

第2は「箴規（しんき）（戒め）、いやしくも納めらるれば、咎悔（きやうかい）（過ち、悔い）生ぜず」と。

美術的にも鮮やかで、聖武天皇の部屋を飾るにはふさわしいものであったろう。

また天皇についても不思議でない「広く内典を学び、経史を遊覧し、仏法を敬信し、人民を慈愛す」舍人親王や、「日本の学生で唐国にほどこした者は、真備と阿倍仲麻呂」と言わ

せた秀才下道真備などからも直接の薫陶を受けたはずである。

聖武天皇が仏教に皈依していたことはよく知られている。だが儒教が中心であった時代に誰が仏教を教えたのか。即位直後の政策に既に仏教の思想的なことが垣間見られることから、すでに皇太子時代に仏教について相当深く学んでいたと考えられる。大安寺の開祖道慈の存在である。英才の誉れ高く遣唐使に加わり唐に渡っている。皇太子、後の聖武天皇に送った一首が「懷風藻」に残っていて

三宝 聖徳を持ち、百靈 仙寿を扶く

寿は日月の共長く、徳は天地の與久しくあらむ。

即ち仏教用語「三宝」を使って長寿を唱えている。この道慈の功績の一つはこの義浄による「金光明経」の新訳「金光明 最勝王経」10巻を持ち帰った事である。天武/持統の二人の天皇が際立って「金光明経」を重視した事である。このころ四天王信仰が根付きつつあり、これ等の神々は単に慈悲心を持って守護するばかりでなく、憤怒の心で厳しい罰を下す存在でもあると理解されていた。この四天王信仰をはっきり説いているのが「金光明経」である。天武天皇は672年仏教による国家護持の方針を打ち出し、とりわけ「金光明経」を重視した。「金光明経」は国王がこれを信奉すれば四天王がやってきて、その国王が治める「国土」を守護するのだと説いている。すなわち、支配者の為の經典と言えよう。天皇を頂点とした身分社会を絶対とし、万葉の歌人柿本人麻呂は「大君は神にしませば、・・・」と歌を奉っている。天武天皇はこうして絶対的な権威を手中にしたが、志半ばで

崩御し、持統天皇に受け継がれ、生身の人間のまま神となった天皇の姿を見ることが出来る。現人神あらひとがみの考え方の原理は、この「金光明経」に見いだせるのである。聖武天皇も租祖父やその皇后の持統天皇に多くの影響を受けたであろうし、「金光明経」についての知見も得たに違いない。

(4) 仁徳の帝たらんと 養老8年(724)2月4日、聖武天皇は元正天皇の譲位を受け、平城宮の大極殿で即位の儀式を受けた。時に御年24歳。即位に当たり天皇のお言葉・宣命あきつかみが述べられた。「現神あらかみと大八洲おおやしま知らしめす倭根子やまとねこすめら天皇が・・・」非常に長く難しいので要旨は

- ① この世に姿を現した神として、日本の国道を統治される[聖武]天皇が詔されるので、その命を皇子や皇族・大臣・文武百官以下、天下すべての人民はよく聞くように。
- ② 高天原に住まわれる皇祖神が・・・「この天下は、貴方の父文武天皇があなたに賜られた国土である」とこの恐れ多い大命を皆もよく聞くように。
- ③ 元正天皇が仰せられるには「・・・すると昨年天地に大瑞が現れたので、御世の年号を神亀と改め、日本の国の統治権をわが子あなたに授けよう」と。
- ④ 「・・・自分としてはこのように恐れ多い大命を辞することもならず、・・・親王以下は明清直心を以て朝廷を補佐し・・・」
- ⑤ ついては朕としては、遠き皇祖以来今に至るまで、歴代の天皇によりその時々状況に応じて統治されてきたこの国土と天下を立派に治め、その公民を慈しもうと思う。よってここに大赦を行う。

聖武天皇としてはなにかと周囲に気遣いされており、当時の状況が決して絶対君主を許すような、生易しい状況ではなかったことがわかる。

2月4日の即位式の当日、舎人、長屋王ほか議政官に対し位階の昇叙と封戸の加増が行われた。また同日、聖武天皇は母の藤原宮子夫人を「大婦人」と称するよう口勅を出した。天皇の生母に対する尊号賜与が行われるようになった最初と言われる。22日はいよいよ文武百官の番である。次々と授位が行われ「続日本紀」には総勢50余名の名前が授けられた位階とともに列記されている。為政者は片時も休む暇はない。そうした中、陸奥の国から「海道なみしの蝦夷」が反乱し次官が殺されたという報告が入った。陸奥の国から平城京まで駅遞で8日、次々と入る情報では大規模な反乱と考えられ、即位したばかりの新天皇の出鼻をくじく形となった。4月7日律令政府は藤原宇合を大将に坂東9国の兵3万人を鎮圧に向かわせている。蝦夷の鎮圧は夏には徹底的に鎮圧され、聖武天皇は紀州の国に行幸している。

11月には即位に伴う大嘗祭が催され、太政官は平城宮を壮麗なものにするべく奏上した。「万国の朝する所、是壯麗なるに非ずは、何を以てか徳を表さむ。その板屋草屋は、中古の遺制にして、営み難く破れ易くて、空しく民の財を尽す。・・・瓦舎を構え立て、塗りに赤白と為さしむことを」と。事前に天皇の意向を汲んでいたであろう。直ちに許可が下りた。奈良時代の建物が瓦葺、朱塗りの柱、白漆喰仕上げの壁となったのはこの時からである。

(5) 新天皇の政治方針 神亀2年(725)新天皇になって初めての政治方針・詔が発せられた。それは、「幸せを願うならば神仏を祈る事が肝要である。祈りの場となる寺院の境内は何よりも清潔に保たれねばならない。家畜が放たれている境内は国史が率先して清掃すべし。僧尼は「金光明経」を誦読し、国家の平安を祈るように」と。即位2年にして初めて「金光明経」を持ち出し、天武天皇以来国家の指導理念の源泉として重視された經典である。文武天皇が慶雲2年、凶作を傷んで五大寺に「金光明経」を誦読させて以来20年ぶりであった。聖武天皇が社寺の清掃を命じたのは、天災が起こらず、民が幸福に暮らせるようにとの願いからであった。

「朕は徳も薄く終日政務に励んでも夕べには気が重く不安にかられる。天も朕の至誠を感じてくれず、宿星に異変も起こり、地震も起こった。こうした天変地異の責めは深く自分にある。・・・よって三千人の出家を許すので、諸寺においては仏典を転読するように。これによって災異が除かれるように」と。詔を出したのは攘災招福にあるが、その手段として徳を施すことにあると言うのである。

即位2年目の12月1日、日蝕が起こった。この日蝕が起こって12月21日に新たな詔が出された。死刑になったものは別として、死刑の確定していたものは流罪に、その他すべての罪人に減刑が行われた。聖武天皇は

「史記」の中の前漢の文帝の故事を知っていたのであろう。文帝は「罪人が出るのは、朕の徳が薄くて、教化が明らかでないからであろうか。罪人に肉刑を与えてどうして民の父親と言えようか。肉刑を廃止せよ」と。聖武天皇も文帝と同様、この故事に憐れみを抱かれ、それが即位してからの政策として現れたということである。聖武天皇にとって前漢の文帝に大きく影響されたようである。「史記」を表した司馬遷も文帝を評して「何と仁徳の帝ではないか」と歎じている。

しばし、文帝（高祖劉邦の中子5代皇帝）に関して少し長いが聖武天皇に影響したと思われる故事の内から：文帝の治世に日食が起こったことに関して詔が出された。

「朕は聞いている『天が万民を生じ、これがために君をおいて養い治めさせる。人主が不徳で、その施政が公平でないと、天は災いを示してその不治を警告する』と。ところで、この11月に日蝕があったが、これは譴責が天に現れたのである。これより大きな災いがあるか。天下の治乱の責めは朕一人にある。ただ、2、3の執政の大臣がいるが、これはわが股肱のごときものである。朕は、下は万民を治め養う事も出来ず、上は日・月・星の三光の明を煩わせている。その不徳は大きい。この令状が至ったならば、みなみな朕の過失、知見の至らざる点、思慮の行き届かぬ点について考え、朕に告げよ。また、賢良方正の士でよく直言・極諫する者を推挙して、朕の及ばざる点を匡正せよ。……』と。

聖武天皇は文帝の伝記を読み進むうち、これこそ自分の鏡とすべき君主だと脳裏に刻んだに違いない。文帝同様、奇しくも治世2年に日蝕が起こって、自らを文帝と重ね合わせたに違いない。治世3年目に入って、聖武天皇の徳治の思いは、ますます高まっていった。神亀3年（726）6月、天皇は詔を下した。「民のうち、あるものは慢性の病にかかって年を経ても癒えず、ある者は重き病を得て昼夜に苦しむ。朕は民の父である。憐れみの心を起こさないということがあろうか。平城京・畿内のみならず、六道の諸国に医者を派遣し、薬を与えて、これ等の患者を救い癒しめるように。また病の軽重によっては、米穀等食料を下賜するように。担当役所の典薬寮ならびに諸国の国司は、心して朕が意にかなうよう事に当たれ」と。

聖武天皇はこうして「仁徳に帝」たらんと、日々政に意を払ったのである。

(6) 難波宮の造営 聖武天皇は神亀3年（726）播磨の国への行幸の為、10月7日に平城京を出発した。途中明石に付くと扈從した人々や参集した国郡司らに位を授け、百姓の内70歳以上には米穀一斛を下賜した。また播磨国内の罪人に対する恩赦も行われた。聖武天皇はこの播磨行幸の帰途、難波宮に立ち寄り、藤原宇合（東北の反乱を鎮圧した男）に命じて大規模な宮殿の造営に着手するように命じた。難波の宮があった難波津は古墳時代以来、東アジア世界への窓口として重要な港であった。難波宮の造営は急ピッチで進められ、神亀4年（727）2月には造営に携わる扈民に対して、税制上従来よりも優遇する処置がとられている。それから5年後、天平4年（732）3月、藤原宇合以下が褒章を受け、その後は造難波宮長官が維持管理にあった。

(7) 官人の勤務評定 神亀4年（727）2月文武百官700名近くを招集し詔を宣布した。即ち、「この頃、天帝の咎めかと思慮される災異が起こることしきりである。災異が起こるのは、朕が徳を施す方途を知らず、朕の懈怠によるものであろうか。それとも、百寮の官人たちが奉公に努めないからであろうか。朕は宮廷不覺にあって、官人の執務の実態を詳らかに知ることが出来ない。……」詔が下されたその日のうちに、使者が全国に派遣されたと言う。即位して間の無い天皇からこの勅命を聴いて、中央、地方の官人は震え上がったに違いない。聖武天皇は「金光明経」の教え、「もし世に悪事がなされていても之を見過ごし、正しい法でもって墨を矯正しなければ、悪の原因が増して、国内に争いが絶えなくなる。」の言葉だったのではないか。中央の勤務評定は10日後、地方は10か月に渡って綿密に行われ、官人の筆頭である長屋王も評価の対象とされた。違法行為の最も甚だしいものは従五位下の丹後の国司が流罪、勲位、位階を剥奪されたものも多く記されている。聖武天皇にとっては官僚とは使いこなすべきものであった。また官僚たちは肝に銘じたに違いない。

(8) 皇子誕生 そして悲しみ 神亀4年9月29日、聖武天皇夫人、藤原光明子に皇子が誕生した。聖武天皇の喜びは尋常ではなかった。お七夜の産養いに当たって、死罪以下の罪人に大赦を与え、百官には物を贈り、同じ日に生まれた全国の赤子に布一反、綿、稲20束を与えた。翌日には王臣以下に贈り物を与え、母親の光明子が静養する故藤原不比等邸の従者、女官たちにも贈り物があった。慶賀の宴はまだまだ続く、21日には藤原光明子

に対し食封一千戸の下賜があった。33日目になって、聖武天皇は生後1か月余りの親王を皇太子にするというのである。然し、支配者層上部に異議が唱えられる雰囲気では無かった。皇位継承問題は過去の例をみても解るように早く決めておく必要があった。翌神亀5年(728)8月21日には皇太子に異変が起こりもはや仏法に頼る以外はなく、717体の観音菩薩像と観音経717巻の写経を僧尼に行道させ、重罪犯を除く大恩赦がおこなわれた。が、9月13日皇太子は死去した。亡骸は那富山(奈保山)に葬られた。12月に入って聖武天皇は「金光明経」の新訳を全国に配布し国家平安を祈るよにとの趣旨であった。このころ全国に国分寺建設の構想が出ていたと考えられる。

◎長屋王の変；長屋王は親王である高市皇子の子である。表面上は篤信の仏教信者を装いながら、実は道教的世界観の持ち主であったということである。神亀5年(728)「大般若経」を書写させた「願文」が問題となった。改めて跋文を読み解くと、道教思想によって「聖武天皇に至る歴代天皇は、長屋王の父母の心霊秩序から保護を受けるべき存在とされ、やがては長屋王自らがその後継者となって、君臨する」となる。長屋王は斬首となった。

◎藤原光明子立後の宣命；光明子は臣下の女。皇后はこれまで天皇の皇女または皇族の王の女性になるものとされていた。天皇のキサキは「妃」「夫人」「嬪」に分けられ、皇后の規定はないが、それでも四品以上の品階を有するもの、要するに内親王としているが、皇后はそれ以上とすることになる。ところが光明子は藤原不比等の三女であるから「妃」の下品の「夫人」に過ぎない。それが皇后になるのであるから、前代未聞である。

宣命は長文、難解であるが、

- ① 朕が即位してから6年経った。次に天皇の位を継ぐべき皇太子がいた。その母親である藤原夫人を皇后と定める。
- ② 天下の政治は内助の功が有って然るべき。天に日月、地に山川があるごとく天皇と皇后が並び立つのは、汝らも承知していよう。
- ③ 皇后位は天下に関わる事であり、軽々しく行うべきでないと考え、この5年間選り試みてきた。
- ④ この様に臣下の娘を皇后に立てるのは朕の時だけではない。仁徳天皇も葛城曾豆比古の女を皇后にして、天下の政治を行っておられる。昔から先例のあることなのだ。

だが、結局のところ、藤原氏から皇后を迎える天皇の真意は話されなかった。聖武天皇を巡る女性は光明子だけではない。万葉集に出てくる海上女王、聖武天皇が思いを寄せた酒人女王、その他、5名をくだらない。

かつて聖武天皇は即位後の神亀3年に、新規政策の一環として慢性・重病への医師の派遣と、施薬、病の軽重に応じた米穀下賜を指示したことがあった。天皇のこうした意思に答えたのか、今や皇后となった光明子は、皇后宮職に施薬院を設置したのである。施薬院とは病人に薬を施し、病を治療する施設の事である。皇后の事業はさらに「また、悲田・施薬の両院を設けて、天下の飢え病める徒を癒し養す」と。

皇后が温室(風呂)を建てて貴賤を問わず入浴させたり、東大寺や諸国国分寺が皇后の建立であったかのごとく伝えられていった。このような光明皇后信仰が、逆に聖武天皇の実像を不確かなものにしたかも知れない。

(9) 国家を支える学問 聖武天皇の治世6年目、天平元年(729)国家の根幹にかかわる節目の年である。2月には長屋王の変、8月には年号が神亀から天平へ、さらに光明子が皇后になった。政治の裏舞台では行政改革が粛々に行われていた。天平元年には班田収授の全面的な見直しが行われ、天平時代の富の蓄積に貢献したものと考えられる。天平2年2月27日聖武天皇の意向を汲んで学問奨励を制度化する奏上があった。また陰陽、医術、七曜、頒歴等に携わる博士の老齢化対策として、若者に引き継がせること、異国との通訳が出来る人材の養成などを聖武天皇は勅許した。

天平3年は比較的平穏な日々が続いた。政務の合間に六朝～唐時代の詩文集145編を一気に書き写された。正倉院に現存していて聖武天皇宸翰「雑集」と呼ばれている。聖武天皇がこの筆写を続けていた天平3年8月、天皇から詔が有り、これまで律令政府が徹底して弾圧してきた行基集団に対し、一転してその活動を認め、行基に従う優婆夷・優婆塞の出家を男61才、女55才以上を認めるとされたのである。どうもこの詔は「雑集」の筆者と

無関係ではなさそうである。「雑集」の中身は仏教関係のものが多く、その中に僧積靈実の手になる31種が採り上げられており、当時遣唐使で帰国した道慈が翻訳を手伝ったと考えられる。道慈は天平元年10月に律師に補任され、この年大安寺改修責任者に任じられた。

聖武天皇の仏教思想に大きな影響を与えたと思われる詩文が、「積靈実集」にある「盧舎那像讚一首」で、後の盧舎那仏造立とのつながりを思わせる。盧舎那仏とは「華嚴経」に説かれている仏の名前で、聖武天皇は「華嚴経」についてはかなり深い認識がすでにあつたものと思われる。詩文を解説して示す。

「そもそも法身（盧舎那仏）には（本来）形はないが、衆生（済度）の為に姿を現され、お蔭で百億世界のいづこにおいても、皆み仏のお姿を見ることが出来る。み仏は天上界と地上界の七か所において八つの会座をもたれて、人々と神々とをよく導かれた。・・・うやうやしくも亡き父君の為に、盧舎那仏一軸と天竜八部衆を描かれた。その尊い容貌は円満で、寂滅道場に居るのではないかと疑い、善財童子が（弥勒菩薩の）虚空のごとき法界に入ったかのような心地がするほどであった。」讚文はまだまだ続くが、要は盧舎那仏は法身であり、本来姿かたちはないが、衆生の為に姿を現されると説いていることである。言い換えれば、造像された盧舎那仏は人を救うことが出来るということになる。



天平3年11月15日、聖武天皇が平城京内を巡察中、監獄のそばを通られると、囚人たちの悲しい叫び声が聞こえてきた。天皇はあわれに思い恩赦が与えられ、死罪以外はすべての囚人に減免が行われた。これも、華嚴経の中の挿話に出てきており、聖武天皇が華嚴経からの影響を受けたことは間違いない。「続日本紀」には天皇がたまたま、獄の傍を通ったかのように表現しているが“おそらく、経典を読まれた天皇が、逸話に感銘を受け、自ら統治する首都の監獄は如何かと、わざわざ出向いたのではないだろうか。

この様に辿ってみると、聖武天皇にとって「雑集」の書写は、単なる筆写に終わるのではなく、仏教を主とした詩文の中から、自らの行動の原理を探し求めようとする真摯な学習だったと思える。

いよいよ天平4年(732)正月元旦、研鑽8年に及ぶ治世の実績からか、気力は充実し、自信にあふれていた。聖武天皇は文武百官居並ぶ大極殿での朝賀の儀において、冕服と云う中国の皇帝が身に着けるのと同様の礼冠と礼服を着して臣下の拝礼を受けた。大唐国に及ばぬまでも、有徳の天子たる自信を以てこの国を治めている事を世界に示すべき時であった。唐風の冕冠、冕服を着した日本の天皇は、聖武天皇が初めてである。

聖武天皇の絶頂期に達していた。体が黒くタテガミとしっぽが白い馬が献上され、瑞兆と言うことで、貧しい民に施しが至急された。

(10) 責めは予一人にあり 天平4年夏の旱魃^{かんばつ}は、冕服を着した年頭の聖武天皇の高ぶった氣勢をしぼませた。旱魃は百姓を疲弊させ、翌年は飢饉がやってくるに違いない。ここに聖武天皇の為政者としての真の苦悩が始まった。

聖武天皇は天平4年(732)付けの詔を發した。

「春より早天が続き、夏になっても雨が降らない。百川は水を減らし、五穀は実を萎ませたままである。誠に朕が不徳の致すところである。百姓に何の憂いあつてか甚だしき憔悴に至るや。・・・また京と諸国において冤罪と主張し続けるものあらば、詳細に記録し報告せよ。また、放置されている白骨や遺骨が有れば埋葬し、民は酒を断ち、牛馬などを屠殺を禁じよ。高齢の徒、自存出来ぬ者にはしかるべく賑給せよ。なを天下に大赦を与える。但し、群れを成す強盜犯、受託収賄せる官人、納税物横領者、贋金造り、などを除き悉く免罪とする。」と。

天平4年の夏は殆ど雨が降らず、秋の実りは乏しかった。天平5年(733)種まき用のモミも食べつくし、国家の正倉の稲を無償で貸し付けられた。諸国では疫病に罹る者が続出した。天平4年は、その後の飢饉と疫病が大流行する予兆の年となった。天平6年正月、聖武天皇は前年に引き続き朝賀の儀を取りやめた。正月15日、中央政府は国家が所有している官稲を無償で国司に貸出、農民には5割の高利で貸し付けてよいとした。5割はたかい様であるが、1粒にモミが何十倍になるわけで実際には非常に低利である。

天平6年(734)3月10日、聖武天皇は難波宮へ行幸された。神亀3年(726)播磨の国への帰り道に支持された大規模な造営は6年の歳月をかけて、天平4年3月に一応の完成を見ていたが、聖武天皇はまだその出来栄を検分していなかった。聖武天皇は皇族や貴族、著名な万葉歌人の山部赤人らと住吉の浜辺で、こころ休まる一時を過ごした。「万葉集」にはこの時陪従した人たちの歌6首を載せている。

山部赤人 「丈夫は 御狩に立たし 娘子らは 赤裳裾引く 清き浜びを」 (1001)

官人たちは天皇の潮干狩りの場に臨み、若き女官たちは赤裳の裾を引きながら、清らかな浜辺を歩いていく。平城京に還幸してわずか半年余りの4月7日、日本列島に文字通りの激震が走った。「地大きに震って、天下の百姓の庵舎を壊つ。圧死せるもの多し。山崩れ、川塞がり 地往々裂けること、揚げて数えるべく非ず。」と。最近の地震学の研究では天平6年の地震の活断層は大阪と奈良を南北に走る生駒断層帯が動いたもので、マグニチュードは最大で7.5と言う。阪神大震災が7.3であったのと比べるとその大きさが推測されよう。

官民挙げての救済にも限度がある。飢餓は人心の荒廃をもたらし、犯罪が激増し、牢屋は罪人でいっぱいになった。聖武天皇はこうした事態を受けて、天平6年(734)7月12日自らの心情を吐露し、大赦をあたえるとの詔を出した。「責めはわれ一人に在り」と公言した天皇は政治に自信を持っていたのであろう。然し打ち続く旱魃と飢饉、それに続く大震災、天皇は逃げなかった。これらの原因が自分の政治に何か足りないものがあるのだろうか。今までは徳で以て政治を行うことを基本にして来たが、それだけでは不十分ではないかと。そして仏教に基づく思想の方が民を治める点で優れていると云う理解であった。

(11) 施政の基本に仏教を選択 聖武天皇はそのことを形に表すため、一切経、即ちすべての仏教経典を書写させる事を発願した。一切経の書写の最後には天皇の願文を記載させた。願文には経史(中国の歴史書)に基づく現実的な政治より、釈教(釈迦の教え)が勝ると書かれている。原文は「経史之中釈教最上」とある。

聖武天皇が仏教重視の方針を打ち出して以降も、天地自然はさらに過酷な試練を与えようとしていた。天平6年12月新羅の使節が大宰府に来泊、翌天平7年2月に入京したが事前の相談がなかったとして使節を追い返す事件が起こった。この年の4月頃より疫病が各地ではやり始めた。第1次の天然痘の流行であった。天平7年5月23日、聖武天皇は災異による恩勅をだした。自らの政治に対する天からの咎めのしるしに「戦々恐々として責めわれに在り」と責任を感じて罪人に対する恩赦を与え、自立出来ない者への施与が出されている。8月に入って大宰府から天然痘に掛って死ぬものが多いとの報告が入った。疫病の大流行で民の救済は追いつかず、11月17日に疫病流行による大赦と賑給の詔を出した。

天平8年に一旦は収まったかに見えた天然痘が、9月に入って再び蔓延の兆しが見え、急務には新羅問題よりも疫病対策にあったからである。

天平5年4月3日、4隻に分乗した総勢590人の遣唐使が難波津を後にした。そして無事帰国した中で吉備真備、玄昉は日本の政治のみならず、仏教界に大きな影響を与えた。天平7年3月、玄昉が持ち帰った五千余巻の一切経はすべて興福寺に納められた。日本仏教にとって画期的な事であった。

天平9年、収まりかけていた天然痘がまた流行の兆しを見せた。3月3日疫病流行に不安を感じられたか、聖武天皇は詔して「国毎に、釈迦物の像1体、挟持菩薩2軀を造り、兼ねて大般若経を写さしめよ」と言われた。再度の流行を防ぐには仏教に頼るしか無いと考えられたのであろう。これが諸国の国分寺の本尊と脇仏となったのである。翌4月17日、藤原不比等の第2子で、光明皇后の次兄が天然痘の犠牲になった。その2日後、大宰府から百姓の多くが死んだとの報告が入った。天皇は大宰府管内の諸社寺に奉幣して疫病の鎮圧を祈らせたが、更に不吉な日食が起こり、終に天皇は天平7年の時と同じように大赦の詔を出した。

「今、疫病と旱魃が同時に起こり、田も苗代も干からびてしまった。そこで除災を願って名山大川・天神地祇に

祈りを捧げたが、靈驗は現れず、民は今に至っても苦しんでいる。実は朕の不徳がこの災禍を招いた。よって寛大な仁徳の施策を行って民の苦患を救おうと思う・・・」だが天皇の恩勅でも止まなかった。光明皇后は4人の兄をすべて失い、公卿の8人の内生き残ったのは3名であった。

天皇は人材を補強し、政治の空白を埋めるとともに、政治が「金光明最勝王経」に立脚することを明確に打ち出した。天平4年以来、旱魃、飢饉、大地震、天然痘と続く中で、疫病に汚染された平城京の遷都を密かに考えていたに違いない。唐から帰国した玄昉、真備から直接、洛陽の地形や治水を聴き、また巨大な盧舎那仏が鎮座する奉先寺を拝した時の話を聴いて、次々と湧き上がる構想で熱くなったことであろう。



洛陽・龍門石窟群を対岸から望む。筆者撮影

(12) 国力の回復 天平11年(739)は長年の災異で疲弊した国力を回復させるため、様々な施策が打たれた。詔は、地方官、郡司の削減、経費の削減として、兵士を国に返すこと、農民の借り入れた利息は全て免除、等が執られた。この年は天候に恵まれ稲の生育状況も良好であった。

(13) 河内の知識寺へ あけて天平12年(740)正月元旦、8年ぶりに大極殿において朝賀の儀が執り行われた。渤海使が帰国すると、2月7日かねてから準備していた難波宮へ出発された。

『続日本紀』はこの時の事を詳しく記していないが天平勝宝元年(749)12月27日の天皇の宣命によると「去にし辰年、河内国大県郡の知識寺に坐す盧舎那仏を礼み奉りて、則ち朕も造り奉らむ」とある。むしろこの行幸は、かねがね関心を寄せていた盧舎那仏を是非礼拝したいものだとして心に決めておられ、それを実現されたのであろう。ここに聖武天皇は、盧舎那大仏造立を固く決意されたのである。

知識寺は渡来系の人たちが、知識となって協力し建てた寺院で、聖武天皇も孝謙天皇も訪れ、国家による手厚い保護が続いたが、応徳3年(1086)6月知識寺が倒壊し、今は近くの石神社に心礎が残っている。

天平15年10月15日(743)に、聖武天皇が紫香楽宮において盧舎那大仏を發願する詔を發した。

「朕薄徳を以て恭しく大位を受け、志兼濟に存して勤めて人物を撫づ。卒土の浜己に仁怒に仆(うるお)ふと雖も、普天の下法恩治くあらず。誠に三宝の威靈に頼りて乾坤相ひ泰かにし、万代の福業を脩めて動植咸く榮えむとす。粵に天平15年歲癸未に次る10月15日を以て菩薩の大願を發して、盧舎那仏の金銅像1軀を造り奉る。国の銅を尽して象を鎔、大山を削りて堂を構へ、広く法界に及して朕が知識とす。遂に同じく利益を蒙りて共に菩薩を致さしめむ。」

「夫れ、天下の富を有つは朕なり、天下の勢を有は朕なり。この富と勢とを以てこの尊き像を造らむ。事成り易く、心至り難し。」

「但恐るらくは、徒に人を勞すことのみ有りて能く聖に感くること無く、或は誹謗を生じて反りて罪辜に墮さむことを。是の故に知識に預かる者は、懇に至れる誠を發し、各介なる福を招きて、日毎に三たび盧舎那仏を拝むべし。自ら念を存して各盧舎那仏を造るべし。」

「如し更に人有りて一枝の草一把の土を持ちて像を助け造らむと情に願はば、恣に聴せ。国郡等の司、この事に因りて百姓を侵し擾し、強ひて収め歎めしむること莫れ。遐邇に布れ告げて朕が意を知らしめよ。」

(東大寺に関する追記)

東大寺盧舎那仏像

東大寺大仏は、聖武天皇により天平 15 年（743 年）に造像が発願された。実際の造像は天平 17 年（745 年）から準備が開始され、天平勝宝 4 年（752 年）に開眼供養会が実施された。中国河南省の奉洗寺の大仏がモデルといわれる。のべ 260 万人が工事に関わったとされ、関西大学の宮本勝浩教授らが平安時代の『東大寺要録』を元に行った試算によると、創建当時の大仏と大仏殿の建造費は現在の価格にすると約 4657 億円と算出された。大仏は当初、奈良ではなく、紫香楽宮の近くの甲賀寺（今の滋賀県甲賀市）に造られる計画であった。しかし、紫香楽宮の周辺で山火事が相次ぐなど不穏な出来事があったために造立計画は中止され、都が平城京へ戻るとともに、現在、東大寺大仏殿がある位置での造立が開始された。制作に携わった技術者のうち、大仏師として国中連公麻呂（くになかのむらじきみまろ、国公麻呂とも）、鋳師として高市大国（たけちのおおくに）、高市真麻呂（たけちのみまろ）らの名が伝わっている。天平勝宝 4 年の開眼供養会には、聖武太上天皇（既に譲位していた）、光明皇太后、孝謙天皇を初めとする要人が列席し、参列者は 1 万数千人に及んだという。開眼導師はインド出身の僧・菩提僊那（ぼだいせんな）が担当した。

大仏と大仏殿はその後治承 4 年（1180 年）と永禄 10 年（1567 年）の 2 回焼失して、その都度、時の権力者の支援を得て再興されている。

現存の大仏は像の高さ約 14.7 メートル、基壇の周囲 70 メートルで、頭部は江戸時代、体部は大部分が鎌倉時代の補修であるが、台座、右の脇腹、両腕から垂れ下がる袖、大腿部などに一部天平時代の部分も残っている。台座の蓮弁（蓮の花弁）に線刻された、華嚴経の世界観を表す画像も、天平時代の造形遺品として貴重である。大仏は昭和 33 年（1958 年）2 月 8 日、「銅造盧舎那仏坐像（金堂安置）1 軀」として国宝に指定されている。

現存の大仏殿は正面の幅（東西）57.5 メートル、奥行 50.5 メートル、棟までの高さ 49.1 メートルである。高さと同行は創建当時とほぼ同じだが、幅は創建当時（約 86 メートル）の約 3 分の 2 になっている。大仏殿はしばしば「世界最大の木造建築」と紹介されるが、20 世紀以降の近代建築物の中には、大仏殿を上回る規模のものが存在する。よって「世界最大の木造軸組建築」とするのが望ましい。

2 度の炎上と復興

大仏には、完成後数十年にして亀裂や傾きが生じ、斉衡 2 年（855 年）の地震では首が落ちるといった事故があったが、ほどなく修理されている。その後大仏および大仏殿は、源平争乱期と、戦国時代の 2 回、兵火で焼失している。

平重衡の兵火による焼失

1 回目は治承 4 年（1180 年）の平重衡の兵火（南都焼討）によるもので、この時には興福寺が全焼、東大寺も伽藍の主要部を焼失する大惨事となった。この時、大勸進職として東大寺再興に奔走したのは俊乗房重源（しゅんじょうぼう ちょうげん、1121 年 - 1206 年）という僧であった。「勸進」とは仏と縁を結ぶように勧めることで、転じて寺院の再興などのために寄付を集めること、またその役を担う僧のことを指した。重源は当時来日していた宋の鑄工・陳和卿（ちんなけい）らの協力を得て、大仏を再興、文治元年（1185 年）に開眼法要が営まれた。この時、開眼の筆を執ったのは後白河法皇であった。また、大仏殿の落慶法要は建久 6 年（1195 年）、後鳥羽天皇、源頼朝、北条政子らの臨席の下行われた。

松永・三好の兵火による焼失

東大寺大仏殿（1709 年再建、国宝）大仏と大仏殿の 2 回目の焼失は永禄 10 年（1567 年）、松永久秀の兵火（この時の詳しい戦いの様子は東大寺大仏殿の戦いを参照）によるものであった。この時は時代背景も違い、復興事業はなかなか進まなかった。大仏殿はとりあえず仮堂で復興したが、それも慶長 15 年（1610 年）に大風で倒壊した。大仏は頭部は銅板で仮復旧されたままで、雨ざらしの無残な状態で数十年が経過した。

貞享元年（1685年）、公慶上人（1648年 - 1705年）は、幕府から大仏再興のための勸進（資金集め）の許可を得、ようやく再興が始まった。こうして元禄4年（1691年）完成、翌年開眼供養された大仏と、宝永6年（1709年）に落慶した大仏殿が現存の物である。これは752年当時の物と比較して約3/4の規模になっている。